

地域

ケアリンク

特集

1

2016 Vol 18 No.1

特集編集

関口 史郎

公益社団法人

かながわ福祉サービス振興会

介護ロボット

実用化の現在



あの人に
インタビュー

公益社団法人 日本薬剤師会
常務理事 **安部 好弘**

エンドオブライフ・ケア協会

理事 長尾 和宏

第3回

バイタルサイン依存症

バイタルサイン花盛り

薬剤師、栄養士、介護士の間でも、バイタルサインの測定が花盛りである。各種講習会が開催され、今や医療職でなくてもバイタルサインを測定するのが当たり前の時代になってきた。血圧や脈拍や体温はともかく、パルスオキシメーターによる酸素飽和度の測定が介護施設でも当たり前の光景になった。しかも看取りが近くなると、頻回に測るようになる。

先日深夜にこんな電話がかかってきた。「先生、AさんのSpO₂が72しかありませんー」。急いで往診すると、その72という数字は酸素飽和度ではなく、なんと脈拍数であった。あるいは、今夜が看取りかなという

人の最期の夜に介護職が何度も電話をしてきて血圧と酸素飽和度の低下を伝えてくれた。一度も看取りを経験したことがない彼は、死が怖くて怖くてたまらないのである。「不安なので一度来て欲しい」とのこと。深夜に施設に往診すると、その介護職員が過換気症候群になっていて対応した。患者さん本人は穏やかに寝ているのだが、治療すべきは介護職員だったのだ。過換気症候群になるまでもバイタルサインに駆りたてるものは何だろうか。またそもそも終末期にバイタルサインを測る目的は何だろうか。

私は医療現場のみならず、介護現場も深刻な「バイタルサイン依存症」に陥っているような気がしてならない。バイタルサインを測れば測るほど、それに対応しないといけない

に陥っているという自覚が全く無い。30年前の私もそうだったので、強く責めることはしないが、「誰か教えてやれよ」という思いが年々強くなるばかりだ。元・大阪大学総長の驚田清一先生の名著「待つ」ということ」にあるように、「待つ」ことができない時代に我々は生きている。メールにしてもラインにしてもすべに反応しないと、仲間はずれになる。医療や介護現場でも、「既読無視」は許されないと誰もが考えているので、バイタルサイン依存症を正面切って治そうという人はなかなかいない。

人生の終末期に寄り添うとは

人生の終末期に「寄り添う」とは、バイタルサインを頻回に測定することではない。この世を去ろうとする人の近くに居て、出て来る言葉に耳を傾け、時々でも言葉を交わすことだ。しかし多くの医療・介護現場では、バイタルサインを測定してばかりしている。「他に何をしたいのか分からないので測っているですよー」と、ある介護職員が叫んだ。

私は、「だったら触ってあげてください」

という気持ちになり、「待つ」ということができなくなる。平穏死の条件とは「待つ」こと。終末期においては、待ったほうが有利な場合が圧倒的に多いことを教える人は少ない。

「待つ」ことができた順調先生

30年前、研修病院に変わった先生がいた。看取りが近くなると看護師がバイタルサインの変化を医師に告げる。「先生、血圧が下がっています」「先生、尿量が減りました」「先生意識レベルが下がっています」。そのベテラン先生は終末期患者に限っては、看護師が何を言ってきたりも、タバコをふかせながら「順調・・・」としか言わなかった。点滴をどんどん減らしていた。果たして順調先生

と言った。「何のために触るのですか?」と返ってきたので、「体を励ますようにさすってあげて下さい」と言つと、「そんなことをして何になるのですか?」と若い研修医に笑われた。「それより、最期は何で眠らせるのですか?」と聞いてきたので、「そんなもん在宅では必要無いよ」と答えるとその研修医は、初めて驚いてくれた。「君の病院では末期がんのどれくらいに深い鎮静剤を使うの?」と聞いてみると、「そうですね、半分以上くらいかな」とのことだった。

エンドオブライフケア以前にやるべきことがまだまだある、とオッサンは感じている。

の患者さんは、みな管だらけにはならず枯れるように死んでいった。一方、研修医の私は、一秒一刻でも寿命を延ばそうとありとあらゆる延命治療を必死に行っていた。それが患者に無用な苦しみを与えて寿命を縮めていることを悟ったのは、その10年後だったのだが。詳しくは近著「犯人は私だった。医療職のための平穏死読本」(日本医事新報社)を、ご覧いただきたい。

私は、その医師に「順調先生」というあだ名をつけ、内心少し軽蔑していた。患者の命をもてあそんでいるように見えた。もっと生きさせることができるのに、と思っていた。しかし30年後、気がついたら自分自身が「順調先生」になっていた。というのも当院に在宅研修に来る研修医たちは、全員とていはいほど30年前の私と同じようなことを言っていた。私が「平穏死」について時間を割いて説明しても全員、首をかしげる。病院では、バイタルサインに応じた医療を行うのが当たり前だが、在宅看取りの現場では「物語」を重視した医療をしなければいけない。一生懸命そう説明するのだが、到底理解できない。興味が無いのだ。死は想定外で人ごとなのだ。彼らもまた深刻な「バイタルサイン依存症」

【講座開催日程】

1/30-31：仙台、2/20-21：東京、2/27-28：大阪、4/9-10：横浜、4/16-17：札幌

エンドオブライフ・ケア協会
03-6435-6404

URL : <https://endoflifecare.or.jp/>
E-mail : info@endoflifecare.or.jp